

「おんじゅ」と「わかるじゅ」

吉川 はる奈

ある大学一年生の春の授業で、高校時代に保育園、幼稚園での保育体験学習に参加した学生に、

そのときの感想を書いてもらった。現在、高等学校の家庭科の中で、子どもの発達をできるだけ具体的に理解させるために、実際の保育現場で子どもに触れるという体験学習が実施されるようになってきている。園の先生方の多大な協力なしには実現できないことで、現場の負担は想像以上だ

と思うのだが、学生にとっては子どもに出会う貴重な機会になっている。

高校を卒業したばかりの彼らの記述を読んでいくと実にさまざまに思いで保育の場に身をおいたことが伝わってくる。一部を紹介したい。

◇A男 「子どもたちのほうから積極的に接してくれてとても楽しかった。二歳くらいの男の子が

僕になじんでくれて一緒に本をよみました。その子はちゃんと言葉をしゃべれませんが、僕としつかりコミュニケーションはとれていました。

(略)

・・・彼は二歳の子どもと一緒に本を読むのを楽しんだという。二歳の子どもが話すことばのなかには、「あれ?」と思ったり、こちらの読む内容がわからないのかなと思うこともあったのだというが、気持ちの上で通じないということがなかったという。

高校時代の保育体験学習の中で、子どもの生き生きとした生活の場に初めて参加してみても楽しかったのがきっかけで、保育者を目指している学生もいる。

◇B子 「子どもは元気だなと思いました。三日間テンションを保つので精一杯でした。子どもは

何を考えているのかわからない、会話にならないし……。圧倒されました。(略)

・・・彼女は、子どもと会話にならない、何を考えているかわからないと随分ショックだったという。「自分のエネルギーではついていけず」とにかく「テンションをあげた」と表現した。

「先生たちのエネルギーはすごいと思った」とのこと。「私にはとても保育者ではできないなあ」と結んだ。

◇C子 「いろいろな子どもがいました。どう接してよいかかわからず、ただじゃれているようになってしまいました。(略)



・ ・ ・ ・ ・ いろいろな子どもたちと遊んで、子どもによつてこんなに違うのかとびっくりしたという。ひとりひとりにどのように接したらよいか困つて、彼女は「じゃれているように」遊んだのだという。

◇D男 「何を言っているのかわからず、戸惑いました(略)」

・ ・ ・ ・ ・ 三歳の子どもの会話にはいったのだけれど、何をいつているのかわからなかった、という。自分のほうが子どもたちより年齢が高いのだから、子どもの話す内容は当然わかるつもりでいたので、戸惑つたとのこと。話の中身がどんな変化していく。わからないままにどんどん変わっていくので、困つたのだという。

このように子どもたちからあふれるたくさんの

ことはを耳で「きいて」、「わからない」と戸惑う学生。音に頼つて「話す内容がわからない」、「何を考えているかわからない」から、とにかくテンションをあげて過ごした学生、「ただじゃれていたら」という学生。

これでは「楽しさ」を感じにくいだろう。ここに、彼らの人間関係の苦手な様相が透けてみえるような気がしてならない。もちろん、「わからない」中に「楽しさ」を感じてくる学生もいる。

保育所体験学習をより意味のあるものにするためにも、そして何より園にいる子どもたちにとってすきな機会となるためにも、彼らに対する多方面からの準備教育と補いが必要だとあらためて思った。そして、子どものことを「きく」際に、子どもの姿、生活全体から理解し「わかる」ことを、学生たちに具体的に、丁寧に伝えていくことが必要だと思った。

(埼玉大学)